

講義ノート (4)

こんにちわ。さて今回はサウジアラビアの地名調査の続きで、地図について考えてみようと思います。「な～んだ」とお思いの皆さんもいらっしゃるかと思いますが、じつは地図を作るということは案外重要な事柄を含んでいます。今のIT時代に直接つながる重大な問題をはらんでいる気がします。このことはヒジャーズ地方の地図化作業に携わっていた当時はほとんど考えもしなかったことなんです、その後の私の研究生活を通じてずっと付きまとうことになり、今また私自身のなかで大きくクローズアップされてきています。必ずしも明確な答えがあるわけではありませんが、それだけに面白い問題を多々含んでいるのではないのでしょうか。そのことを思いつくまま提起していこうと思います。

地図の話に入る前に、前回とは反対に、今回は「報告」テキストをまず最初に読んでいただきます。『世界の砂漠』という本の一つの章として書いたものです《堀内正樹 2007 「アラビアの砂漠—アラビア半島とシナイ半島の人々の生活と文化」『世界の砂漠—その自然・文化・人間』（堀信行・菊地俊夫編）、二宮書店。 pp.19-50》。今日はその中の「(1)アラビア砂漠の環境認識」(p.20-29)という節だけで結構です。ヒジャーズ地方の地形に付けられた語彙を解説しました。細かな説明がありますのでお読みください。

さて、その本で挙げたさまざまな地形語彙ははじめから知っていたわけではもちろんありません。じつは作業の出発点として我々が参照したある地図があって、その凡例に幾つかの地形語彙の説明が書かれていました。下の写真がそれです。サウジアラビア石油鉱物資源省がアメリカ合衆国内務省地質調査所の協力を得て1960年前後の数年間に作成した模造紙大の50万分の1地図です。とはいえもちろんこれは実質的にはアメリカが作った地図で、その青焼き（今ではもう使用することはほとんどなくなりましたが、複写紙の一種です）を参考にしつつ現地調査に当たったわけですが、なかなかよくできた地図でした。英語とアラビア語が併記してあるので使いやすかったですね。ただし50万では大雑把すぎて現場での実用向きではなかったんです。だからもっと詳しい地図の作成をサウジアラビア政府は発注したということでしょうね。

INDEX MAP OF ARABIAN PENINSULA

مبصحات
GLOSSARY

أشرف	Abraq	Rocky hill with sand on slopes
عين	'Ayn	Spring, solution pit, or well
بارق	'Barq	Broad rocky hill with sand on slopes, larger than abraq
بئر	Bi'r; pl. Abyār, Ābār	Dug well
بيكة	Birkah (t)	Cistern
بئر	Daḥl	Deep sink hole or solution cavity
صحن	Ḍiḥ; pl. Ḍulū'	Hill, usually smaller than a jabal
فج	Fayḍah (t)	Closed basin with firm, flat, vegetation-covered mud surface, occasionally rocky and sandy
حماد	Ḥamād; (refer to Al Ḥamād on map)	Stony upland plain
حرار	Ḥarrah (t); (refer to Al Ḥarrah on map)	Lava flow and volcanic debris
حصن	Ḥiṣn	Fort
جبل	Jabal; pl. Jibāl	Hill or mountain
خاب	Khabb	Hollow between dunes or 'irqs
خبر	Khabrā', Khabrah (t); pl. Khabārā'	Closed basin with firm, flat mud and silt surface, commonly barren and lacking vegetation
خليج	Khalīj	Bay, gulf
كباشم	Khashm	Headland or promontory along a cliff or mountain front
خز	Khawr	Salty or brackish well; saline bay or inlet
مشاش	Mishāsh	Shallow hand-dug well
قاع	Qā'; pl. Q'ān	Depressed plain
قلعة	Qal'ah (t)	Fort
قارح	Qārah (t); pl. Qūr	Flat-topped hill, usually rounded
قصر	Qaṣr	Fort, palace, or castle
قلبان	Qalbān; plural of Qalīb	Well, spring
ريح	Ri'	Passage in a cleft or gap of the mountains
ريجة	Rijlah (t)	Small tributary, stream
سبخة	Sabkhaḥ (t)	Silt, clay, and sand flats, often with saline incrustations
شعب	Sha'ib; pl. Shi'bān	Same as wādī, usually smaller
تل	Tall; pl. Tulūl	Hill, mound
ثنية	Thaniyah (t)	Pass or defile between heights, usually shorter than a ri'
عراق	'Urayq, diminutive of 'Irq	Small linear sand ridge
وادي	Wādī	Valley or dry water course

地図の凡例

私はここに書かれた凡例を手がかりに現場の調査を始めたのですが、次第にわかってきたのは、ここに説明された内容がちょっと違う場合が多いということでした。当たり前といえば当たり前ですが、実際にベドウィンが使うときには意味が違ったり、発音が違ったりということがよくありました。またベドウィンのあいだでも人によって使い方が異なるということもわかってきました。そしてこの凡例には載っていない語彙も当然出てきます。ですからこの凡例はあくまでも参考という位置づけです。あたかも「平均的日本人」というのが実際にはどこにもいないとか、あるいは「広辞苑」に載っているような言葉を日常生活で話す日本人が実際にはいない、といったことと似ています。

ちょっと具体例で考えてみましょう。ワーディー・ジズルという大きなワーディーの奥のアブー・ラーガという山がちの地方へ行ったときの話です。最初の日についていってもらったベドウィンに私が目の前の山を指さして「あの山（ジャバル）はなんという名前？」といったものように聞きました。彼は怪訝な顔をして「どこ？」といいます。車を降りてよく説明して「あれだよ」といったら、ようやく「ああ、あれはジャバルじゃなくてタッル（単独峰）だよ、タッル・アティド」。この数日後、事情があって別のベドウィンを連れて同じ地域を再調査しました。そして確認のために「あれはタッル・アティドでいいんだよね」といったら、「ジャバル・アティドだよ」という返事が返ってきたのです。「アレッ」となりますよね。

同じものがある人は「タッル」だといい、別の人は「ジャバル」だという。こういうことは地名調査をしていればよくあることです。結局私はあとの人が言った「ジャバル」のほうをとって記録しました。その人のほうがほかにもたくさん地名を知っていたからなんです、はたしてそれでよかったのか、今もよくわかりません。

このような単純な事例は私たちの身の回りにもたくさんあると思います。目の前に動物がいるとして、ある人はそれを「犬」だといい、別の人は「狐」だという。机の上に置かれた細長いものがある人は「ペン」だといい、別の人は「筆記具」だという。言葉による分類の仕組みを問題にする認識人類学(Cognitive Anthropology)とか民俗分類(Folk Taxonomy)とか呼ばれる分野では、前者のような違いを「並列的」な関係、後者を「階層的」な関係と呼びます。わかりやすくいえば、前者はあれかこれかといった横並びの言葉、後者はこれはあれに含まれるという上下関係にある言葉だと考えればよいでしょう。ジャバルとタッルの場合、私はそれらが横並びなのか上下関係なのか、いまだに判別できません。しかも、横並びであれ上下であれ、「両方とも分類システムとしての言葉のしくみ自体は人々に共有されていて、その適用の仕方が違うだけだ」とふつうの研究者なら説明するでしょう。つまり二人のベドウィンとともに「ジャバル」の意味、「タッル」の意味は同じようにわきまえていて、目の前のブツにどちらの語を当てるか、その適用の仕方が違うだけなのだ、と。

そもそも認識人類学を含む記号論は言葉(=記号)とその意味を問題にするだけで、<言葉および意味>と<ブツ>(=指示対象ともいいますが)との対応関係は恣意的で無関係なもの(これを無契性といいます)だとして切り捨てます。だから今言ったような説明が出てくるのですが、でもそれでいいのでしょうか。私はそこが問題なんだと思います。地名調査をした当時、まだ私は人類学とは無縁だったのですが、もし人類学の知識があったなら、認識人類学の方法を援用して語彙素分析から始めたかもしれません。語彙素分析というのは、認識人類学の一つの到達点と見做されるバーリンという人が1970年前後に完成させた通文化的な分類体系の記述・分析方法(バーリン・システムと呼ばれています)の出発点に置かれる作業です。でもやっぱり、知っていたとしても私はやっていなかったかな。

調査当時はまだ自分が抱いた疑問を明確化できなかったのですが、今思うのは次のようなことです。問題の一つは、具体的なブツから切り離されて空中にふわふわ浮かんでいるような言葉などというものがあろうかという点。もう一つの問題は、誰それさんといった具体的な個人の使用から切り離された、だれのものでもないそれ自体で存在する言葉(あるいは逆に言えば、みんなが同じように持っていると言葉)などというものがあろうか、ということなんです。じつはこの二つの問題は同じ事柄の二つの側面であって、根は一つです。それは<記号と意味>という範囲に自らを閉じ込めようとしたある大きな思想潮流の産物だということです。言葉の一部である「数」に関して、最もストレートな形でこの問題を突きつけたのが数学でした(ちなみに、数学も言葉だという認識は今でも数学者たちに残っています)。それは19世紀半ばから20世紀にかけて展開された「数学基礎論」

ないし「基礎数学」「純粋数学」といわれる、今ではあまり人気がないのですが、しかしその影響力の大きさを考えるとひじょうに重要な分野です。

そこで、数学でいったい何が行われたかということ振り返ってみましょう。まずはそれまで長いあいだモノの個数とか長さとか重さといった、外的存在（つまりブツですが）と密接に関連付けられていた「数」を、そうしたものから切り離して、単なる記号の列とみなそうという「存在論的転回」と呼ばれる動きから出発しました。数というものは先験的存在などではなく、定義によって新たに創り出せるものだというわけです。確率論で有名なガウスの弟子であり、集合論のリーダーともいわれるデデキントという数学者は「数は精神の自由な創造だ」「数の要素から順序以外のすべての性質を取り去れ」と言ったのだそうです。こうして「数」はブツの世界から解き放たれて、記号と意味から成る世界で遊ぶことになりました。数は定義できるかできないかといった問題も含めて、ともかく記号としての数と、数の意味についてさまざまな議論が行われたわけです。

そしてやがて「論理」という「意味」の昇華物みたいなものに主役の座が与えられ、その論理を、曖昧さを排除するために記号に置き換えて表現するという「記号論理学」ないし「数理論理学」が誕生しました。論理式と言われるものが代表例で、へんてこな記号のほかギリシア文字やヘブライ文字なども用いられるのは皆さんも目にしていますよね。そこでは論理には矛盾があってはならないということ（＝無矛盾）を前提に、数学の体系作り、つまり意味の体系作りが目指されました。そうやって、出発点に置かれる仮定、つまり公理ですが、公理を矛盾なく組み上げていって一つのシステムができあがります。（もともと、論理というのは「真か偽か」といったおなじみの単純な二項対立に基づく古典論理が唯一のものではなくて、その後「多値論理」とか「矛盾許容論理」とか「量子論理」とかさまざまな論理が提唱されてきているようですから、ことはそれほど単純ではないのかもしれませんが、今は深入りしません）。なお無矛盾の公理体系というのは形式の整合性を目指すわけですから、形式主義とも呼ばれました。ドイツのゲッティンゲン大学のヒルベルトという人がその集大成を企図したといわれています。ともかくこうした方向に進んで行き着いた一つの形が、ニコラ・ブルバキというフランスを中心とした若手の数学者集団が提示した「構造」という考え方でした。数学を根底から支えるのは、特定の集合の上にさまざまな公理系で定義される構造である、というわけです。ただし構造といっても一つではなく、基本構造の上に代数構造やら順序構造、位相構造などが乗っかって数学全体のシステムができるというのです。こうした考え方を「構造主義数学」といいます。基盤に置かれているのはもちろん集合論です。

ところが構造主義は数学者の専売特許ではなく、じつは言語学のなかで先に生じていたのです。ソシュールという名前を聞いたことがあるかもしれません。ソシュール(1857- 1913)は構造主義の祖とも呼ばれる人です。彼のほぼ同時代にソ連やチェコ、アメリカなどの言語学でも同じような考え方が生じていたそうですが、それはともかくとして、彼が音声学と並ぶ言語学のもうひとつの柱である音韻論の分野で提起した音素の考え方がその後さまざま

な分野の人たちに継承・発展させられて、20世紀半ばの構造主義の流行につながりました。人類学の分野にこれを持ち込んだ人としてレヴィ＝ストロースが有名ですね。なお第1回目の授業のコメントを寄せてくれた皆さんのうちの何人かが言及していた『オリエンタリズム』を書いたエドワード・サイードも構造主義者だと私は考えています。

さてソシュールの主張はどういうものだったのか。それは数学基礎論の場合とは逆に、記号が意味を生み出すという立場です。記号というのはこの場合「音素」つまり言葉を作り上げている最小の単位のことですから音声記号といってもよいのですが（日本語の場合だったら、「き」とか「さ」とか「り」とかいった音声相当します）、その音素は単独では存在し得ない。ほかの音素たちとの差異（違い）によって結果的に成立するので、さまざまな差異の束が整合的に組み合わせられた全体としての体系（システム）がまずなければいけないというのです。差異の体系ということですね。ですから「はじめから存在する構成要素が積み上げられていって全体ができあがる」といういわゆる実体論的な要素還元主義と真っ向から対立し、実体論に対して関係論とも称されます。全体があって初めて個が成立する。しかもその「個」（＝音素）は最初から存在するものではないから、物理的にいかなる音声もそれを成り立たせているのかは確定できないし、確定する必要もない。そして「意味」なんていうものはそうした音素がほかのいくつかの音素と組み合わせられたところに生ずるのだから、いってみればおまけみたいなものなんです。ですが意味の違いを生み出さなければ音素は機能しないのですから、意味を捨て去ることはできないのです。

ニコラ・ブルバキに戻ると、彼らは意味を優先させる数学の形式主義と、記号を優先させる言語学の構造主義を合体させたとも言えるわけで、鶏が先か卵が先かという議論を両方必要だという形で妥協させたのだと私は思います。そして妥協の前提として、全体性とか体系性とか関係性ということを前面に押し出した。

大分遠回りをしてしまいましたが、先ほど私が「具体的なブツから切り離されて空中にふわふわ浮かんでいるような言葉などというものがあるのだろうか。誰それさんといった具体的な個人から切り離された、だれのものでもないそれ自体で存在する言葉などというものがあるのだろうか」と疑問を呈した理由がこれでおわかりいただけたのではないかと思います。数学も言語学も、具体的なブツを切り離して<記号と意味>の庭に閉じこもり、しかも具体的な個人という実体に依存しない<全体性>に向かってしまったのです。そしてそれは数学の親戚のような物理学や生物学、そして言語学の友達である哲学なども巻き込んで、学問の縄張りを越えた近代科学のメイン・ストリームとなったのです。その影響力は絶大だったといつてよいでしょう。というのも、科学の枠を超えた政治や社会思想、たとえば民族主義、国家主義、全体主義などといったものの中核にもこの発想を見いだすことができるように私には思えるからです。「近代」はこのようにして出来上がってしまった！

ですが今の私と同じように、こうした流れに違和感を持つ人たちはいつの時代にもいたようです。数学の分野ではゲーデル（1906-1978）という人が、ヒルベルトに代表される公

理論・形式主義に対して、その無矛盾性は証明できないと言い（不完全性定理）、「記号を運用する主体なしの記号づくしの世界などナンセンス」「数学的合理性が機械的だなんてことはあり得ない」といった主旨のことを言ったそうです。ちなみにこのゲーデルという人はナチスから逃れてアメリカに渡った際、アインシュタインと親交を深めたといいますが、変人どうし何か通じるところがあったのでしょうか（笑）。このほかにもすでに触れたことのあるポワンカレとか、クロネッカー、ブラウワーといった有名な数学者たちも論理主義や集合論に対する嫌悪感を示したのだそうです。こういう人たちの仕事は直観主義（人間主義）数学と総称されています。

いまブラウワーが出てきたのでちょっとだけ脱線させていただきますが、彼に関連してもう一人重要な人物がいて、哲学者でありかつ数学者でもあったヴィットゲンシュタイン（1889-1951）です。読んだことのある人も少なくないでしょう。彼は若い頃、形式主義・論理主義を極めたと言えるような『論理哲学論考』という名著を著したのですが、1928年にこのブラウワーの講演を聴いて180度方向を転換し、晩年の有名な『哲学探究』へ向かったといいますが、この種のエピソードが本当かどうかはわかりませんが、本当でなくても一向にかまわないのですが、とにかく若い頃の『論理哲学論考』（略称：論考）が先ほどお話ししたメインストリームの粋とでもいえるのに対して、『哲学探究』（略称：探求）はそれを真っ向から批判するような内容であるのはたしかです。「論考」も「探求」もそれほど分厚い書物ではありませんので、夏休みにでもお読みになることをお勧めします。いろいろと頷けることが書かれています。その後期の「探求」のなかで彼が繰り返し主張していることに、「意味というのは言葉を使う人の使い方によって決まる」ということがあります。ゲーデルの「記号を運用する主体なしの記号づくしの世界などナンセンス」というのに通じますね。それもそのはず、ゲーデルは後期ヴィットゲンシュタインやフッサール、ライプニッツなどに傾倒したらしいですから、なるほどと思います。フッサールやライプニッツにも触れたいところですが、脱線に脱線を重ねることになるのでやめておきます。ただ、フッサールは20世紀半ばに構造主義が大流行した時期に、それと併行するように陰で支持された現象学の生みの親だったということだけいっておきます。現象学はこの授業の第1回目です。ちょっとだけ触れた「実験民族誌」にも大きな影響を与えた考え方です。

そこで脱線ついでにヴィットゲンシュタインとアラン・チューリング（1912-1954）についてひとこと。『ヴィットゲンシュタインの講義～数学の基礎篇～ケンブリッジ 1939年』という本があります。面白い本です。これはヴィットゲンシュタインが前期から後期へと方向転換し始めた頃にケンブリッジ大学で行った数学講義の記録で、のちにコンピュータ時代の幕開けを告げることになるチューリングが学生として出席していて、ヴィットゲンシュタイン先生とのあいだで興味深いやりとりをしたことがわかります。議論は議論として置いておきますが、お互いに認め合っていたというのは面白いです。波長が合ったんでしょうね。チューリングはこのあとナチスの暗号を解読するというとんでもないことをやったあと、コンピューターの原型といわれるチューリング・マシーンというアイデアを出し、現

在に至るコンピューター時代の先駆けになったのですが、そういう人物がなぜ数学のメイン・ストリームの公理主義・論理主義に反旗を翻したヴィットゲンシュタインに近づいたのか。これはその道の専門家に聞くしかありませんが、私のような素人にも岡目八目の利があるかもしれませんので少しかだけ放言させていただきます。

おそらくチューリングは、長らく西欧の哲学者や数学者たちを悩ませ続けてきた「意味」という厄介なお荷物を捨て去ったのではないかと思うのです。どういうことか。「意味」に引きずられていたからこそ、西欧の哲学者も言語学者も数学者も数世紀にわたってさまざまな煩雑で難解な議論を繰り返し、その結果なんら解決の道を見いだせなかった。そこで若きヴィットゲンシュタインは当時一つの到達点であった数理論理学をギリギリまでスリム化し、「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」という彼の有名な言葉に示されるように、無駄や混乱を放逐して明晰さを実現し、ハエ取り壺（混迷）からの脱出をはかった。「やるんならここまでやれよ」「これでおしまい」という心境だったことでしょうか。しかしそれさえもまだ論理つまり「意味」の亡霊から解放されてはいなかった。そこでヴィットゲンシュタインは後期にいたって「意味」なるものを幻想的な純粋物から猥雑な個々人の日常の言葉の使い方に戻し、意味の呪縛から自由になった。チューリングがヴィットゲンシュタインからなにかを得たとしたら、それはおそらく生活の場に戻された「意味」のほうではなく、意味から解放された記号のほうだったのではないかと思うのです。このケンブリッジ講義の前にチューリングはすでに「計算可能数」を提示していたわけで、もしヴィットゲンシュタイン流に言うとするれば「計算できる数は計算し、できないものについては沈黙せねばならない」ということになるのでしょうか。だから前期ヴィットゲンシュタインからは「できることは徹底的にやる。できないことはやらない」というスタンスを、そして後期ヴィットゲンシュタインからは「幻のような意味は捨てろ」ということだったのではないのでしょうか。ですからチューリング以降今日まで、コンピューター科学では「この記号の意味はなに？」という問い方はせず、「この記号は別のどの記号に置き換えられる？」ということになっていると思います。そして計算というのは置き換えという機械的な作業に他なりませんから、それは機械向き。ですから当然機械（コンピューター）は何が正しくて何が誤っているかという判断はできないと思います。そうした判断は「意味」の領域ですから。そしてまたコンピューターは議論もできないと思います。議論もまた「意味」の領域ですから。（もし Mac のコンピューターと Toshiba のコンピューターがなにが正しいかを巡って議論したとしたら薄気味悪いですよね）。というわけで、今日数学基礎論とか純粋数学とかの人気のない理由もおわかりいただけると思います。客観的な意味が存在するという亡霊に取り憑かれていた時点で、もう古いということなんです。だからといってコンピューター科学万歳でいいかとなると、これはまた別問題だと私は思っています。「置き換え」「Mapping」「同じ」といったキーワードの下で、また皆さんと話し合ってみましょう。

なおせっかくだから、計算というのは置き換えだということの実例を示しておきます。わかりやすくなると思います。「 $2+3=5$ 」という記号列があります。2つのリン

ゴと3つのリンゴを合わせると5つのリンゴになる。これは完全にブツと結びついた個数という「意味」に依存しています。ところが「※●◀=□」という記号列を考えてみましょう。2とか3とか5とかいう記号から意味を取り外せばこれでもいいはずですよ。意味がないのですからちんぷんかんぷんでいいはず。ただまだ「=」という「意味」を持った記号と、記号の配列順序だけは残してあります。そうすると※●◀と□は同じ(=)だから置き換えていいよ、というのが計算です。もちろん約束事に過ぎません。さらに※●◀に分け入ってみましょう。「2+3」に相当する部分です。足し算というのが高度な精神作業だと思っている方もいらっしゃると思いますが、足し算というのは単に「意味」です。その意味を取り払えば●です。※の次に置く記号というにすぎません。※の次に●が来て、その次に◀が来たら□と置き換えましょうというわけです。ちなみに掛け算というのはこうした置き換えのルール(約束)を違う仕方にしただけです。2と3と来たら5と置き換えていたのを、6と置き換えましょうというわけです。これが「計算」の本質なんだと思います。

この単純作業を機械に任せるときは、さらにそれぞれの記号を別のものに置き換えます。機械は記号を判別できませんから。それが電気信号の順序です。通電したか遮断されたか、つまりあるかないか(1かゼロかと表現する人もいます)の組み合わせに置き換えるわけです。※というのはたとえば「ある→ない」、●というのは「ない→ある」という具合に。そうすると結局「順番」と「置き換え」だけが残る。どうやらこれが初期のコンピュータの仕組みであり、計算というのもそういうことになりそうです。モルス信号みたいな気もするし、暗号みたいですよ。チューリングがナチスのエニグマ暗号を解読したというのも頷けます。とはいっても、まだ「同じ」(置き換え)という「意味」を担った記号作用が残存している以上は、基礎数学・記号論理学の時代の残泡を引きずっているように私には思えます。そしてその「=(イコール)こそが数学に残された最後の砦であり、それを失ったら数学は消滅する。けれどもそれが最もシビアーな難題を抱えた問題含みの記号だというのが、今の私の理解です。

さて、だいぶ余談が長くなってしまったので、話を元に戻します。「ジャバル」にするか「タッル」にするかという話でした。結局私は「ジャバル」にしたので、サウジアラビアの正式な国内地図では「ジャバル・アティド」と記されているはず。ほかにも、どう記録すべきか悩んでしまう例が数多くありました。一番困ってしまったのがワーディーの名前です。一例を挙げると、これは山岳部でのことですが、当然大小のワーディーがややこしく入り組んでいました。まず最初に記録したのが「ワーディー・サルバ」、一山越えて次のワーディーが「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」、しばらく行ったその次が「ワーディー・ナジュド」。しめしめ、今日は収穫大だぞ、と満足していました。場所によっては(あるい

は同行するベドウィンによっては) 地名がたくさん集まるところと、ほとんど集まらないところがありますから、この日は順調にたくさん集まったので喜んだわけです。その日は行き暮れてワーディー・ナジュドのはずれで野宿したのですが、たき火をして、同行のベドウィンや近くから集まってきたベドウィン数人と夕食の準備をしながら雑談をしていると、地名談義が始まってしまったのです。余談ですが、昼でも夜でもそうですが、食事のためにたき火をしていると、どこからともなくベドウィンが集まってくるんです(笑)。で、そもそも私自身は「ワーディー・サルバ」は「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」と合流するところまでで、「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」は下流でほかのワーディーとも一緒になって「ワーディー・ナジュド」になる、というのが航空写真から判断した理解だったのですが、いやいや「ワーディー・サルバ」と「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」が一緒になったら「ワーディー・ナジュド」だという人もいて、さらに、いやいや「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」なんてそもそもなくて、あそこに「アバー・ル・ギザーズ」という村があるだろう、だからあの辺のワーディーはみんな「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」でいいんだ、だから「ワーディー・サルバ」も「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」と一緒だ……。いやはや、ややこしくなって、でも話は大いに盛り上がりました(笑)。で、結局どうしたかという、私は当初の私の案を記録して提出しました。

名前とブツを一対一対応させるのがいかに大変なことかを実感した一幕でした。それとともに、名前なんてどうでもいいのかなとも思いました。結論や合意らしきものが出ずに、それぞれ違った意見を持っていても、それで日々の暮らしには一向に差し支えがない。地元の人たちはもう長いことそれでやってきているんですからね。

地名についての悩みをもう一つ。固有名詞と普通名詞の区別についてです。先のアメリカ製の地図の凡例にも載っているし、私も本の中で挙げた地形語彙の一つに「ラハバ」というのがあります。まわりを山に囲まれた盆地のようなところを表すのですが、これが地名として使われている場所があります。地元でラハバと言えどこなのかすぐにわかります。またまた余談ですが、モロッコの南部にマラケシュという町があります。そのスク(市場)はメディナと呼ばれる旧市街のなかにあり、北部の都市フェズのメディナとともに世界遺産になっていて、多くの人で賑わっています。迷路のような混沌さがウリなんです。そのマラケシュのメディナの一角に「ラハバ」があるんです。まわりに薬種商の店が立ち並び、真ん中が小さな広場になっています。この広場が「ラハバ」と呼ばれていて、ああ、こんなところにもラハバがあるんだと感慨深かったです。

普通名詞が固有名詞に転用されていると言えばそれまでですが、その逆があまりないのはどうしてなんだろう。日本でいえば「銀座」という固有名詞が普通名詞化して日本全国に銀座がありますよね。「富士」もそうですね。そういった例がアラブ世界にはあまりないような気がします。まあそれはともかく、普通名詞を地名に使う例の代表的なものが「ナフード」です。砂丘が延々と続く一帯で、我々が典型的な砂漠のイメージを持つ景色ですね。で

もこれがアラビア半島北部の大砂漠の名前になっています。半島南部にはさらに大きな砂漠があり、「ルブウ・ル・ハーリー」ですが、これは直訳すれば「からっぽの（＝だれも住んでいない）区域」というわけですから、とても固有名詞とは思えません。さらに言えば「サハラ砂漠」もそうでしょう。「サハラ」自体がすでに大規模な砂漠を表す普通名詞ですから。

そこで困った例がありました。ヨルダンに近いトゥベイクという地域を調査したとき、もう地名蒐集作業に慣れてきた同乗のベドウィンが「あれはトゥエイサートだ」「書け」と、おそらく親切心から、教えてくれました。でも一つの砂丘が「トゥウース」で、その複数形が「トゥエイサート」ですから、これを地名として記録していいかどうか悩みました。「ほら、あそこに砂丘地帯があるだろ」くらいの発言だとしたらとても地名とはいえないし、どうしたものか。結局「エイヤ」で記録したと思います。地名は多ければ多いほどいいだろうという判断です。いい加減ですね（笑）。でも、地名は固有名詞であれねばならないというのは私の勝手な思い込みかもしれないし、そもそも固有名詞と普通名詞は区別すべきものかどうか、あるいは区別できるのか。このことは、地図にしなければならぬという特殊事情がもたらした悩みかもしれないですね。本当はどちらでもよいことかもしれません。

この話題に関連して、人名についてもちょっと考えてみましょう。我々調査隊の顧問のような仕事をしてくれたアブー・アーイシュ翁のことは前回お話ししました。「アブー」というのは誰某の父という意味ですから、彼は「アーイシュの父」。ですから彼にはアーイシュという名の息子がいるのかと思って、聞いてみたことがあります。いないということでした。とすれば「アブー・アーイシュ」というのはこれ自体で彼自身の名前つまり固有名詞かもしれません。ちなみに直裁的な命名を避け、こうした親族関係を用いるいわば婉曲的な命名法を人類学ではテクノニーム (teknonym) と呼びますが、皆さんがすでにご存じのアラブ人の名前にはテクノニームがたくさんありますね。イブン・ハルドゥーン（「イブン」は誰某の息子）とかアブー・バクルとかイブン・シーナーとか最近ではビン・ラディン（ビンはいブンの属格形）とか。なかには本当に親子関係を表している場合もありますが、アブー・アーイシュ翁のような場合も決して珍しくありません。1975年に亡くなったアラブ世界では今でも知らぬ者のないエジプトの女性大歌手ウンム・クルスーム（ウンムは誰某の母）は預言者ムハンマドの娘ウンム・クルスームの名をそのまま取っていますから、たぶん彼女にはクルスームという名の娘はいないだろうと思います（ちなみに、前々回お話しした「赤坂小町の旅」の帰途カイロに立ち寄ったとき、偶然彼女の大葬列に遭遇しました。ラムセス駅から解放広場に至る大通りを埋め尽くした大群衆に圧倒されました）。

ではこうしたまどろっこしい方法ではなく、直接個人を表す名前がないかといえば、当然あります。ムハンマドに始まってムスタファ、アリー、ハサン、アブドゥラー等々、さらにはこれらの名前の派生形、例えばムハンマドについてはアフマド、マフムード、ハーミドなど。とはいえほとんどの名前はどこにでもあるものですから、名前の総数はしれています。女性については、最近ずいぶんモダンな名前が付けられてバラエティが増えているとはい

え、圧倒的多数はやはりハディージャとかアーイシャ、ファーティマなど預言者ムハンマドの家族や縁者あるいは歴代の預言者たちの縁者からとられたものですから数は限られています。そうすると個人名だけではその人を特定するのが難しくなります。目の前に当人がいるときはともかく、第三者として言及するとき、「きのう町でムハンマドに会ってさあ・・・」などという「それだれ?」「どこのムハンマド?」と問い返されるのは珍しくありません。ムハンマドなんて、どこでも山ほどお目にかかる名前ですから。となると、明らかな固有名詞であるのに、それは個を特定する機能を持たない。変な話ですね。ですから固有名詞と普通名詞の区分なんてのも、どっちでもいいことなのかもしれません。

言葉の問題に関してもう一つだけ。聞き取った地名をどう表記するかという悩みです。これは言語表記一般にいえることです。簡単な具体例でお示します。さきほど「ワーディー・アバー・ル・ギザーズ」というのがありました。この「ギザーズ」の「ギ」という音はアラビア語の正則語（フスハーといいます。どの国でも通用する標準語です。学校で習う正式・公式のアラビア語といってもいいでしょう）で表記するときには「キ」（＝「q」「ق」）と表記するのがふつうです。それが地元ヒジャーズ方言では「ギ」（＝gi）と発音され、もしエジプト人がこれをエジプト方言で発音すれば「イ」（＝i）となります。すると地元の人たちは「ギザーズ」といっているのにアラブ人一般は「キザーズ」といい、エジプト人は「イザーズ」と呼ぶこととなります。これはよくある事例なので、我々は機械的に「q」「ق」で表記して報告しましたが、よく考えると、地名とは一体だれのものなんだろうという疑問がフツと湧いてきます。もし地元で実際にこの地名を使っている人たちを重視するのなら「ギ」という音を表す文字を考案しなければなりません。正則アラビア語にはそういう文字はありませんから。（もっとも、モロッコではkに相当する「ك」 という文字の上に点を三つ付け足して g という音を表す文字を苦肉の策で作っているし、ペルシア語圏ではやはりアラビア語にはない「p」の音を表すのに b の文字「ب」の下点を三つにして対応するというように、それなりに工夫はされています）。ですから、私が正則アラビア語で機械的に記録した地名は「だれのものでもないふわふわしたもの」なのかもしれません。地図を作るということ自体がそうなのでしょう。このことは最後のほうでもう一度考えます。

ところで、現地の人々の音（声）に忠実であろうとするのは言語学者です。特に記述言語学に携わり、フィールドワークを行う誠実な言語学者は、自分の目の前のインフォーマントの話す言葉に全精力を傾け、できるだけ忠実にそれを記録しようとします。そうすると、手持ちの記述用の文字や記号では到底足りませんから、いろいろ新しい表記記号を創り出すこととなります。というのも、言葉というのは部族ごとに違うし、村ごとに違うし、細かく見てゆけば一人一人みんな違いますから、発音だけとってみても、膨大な数の表記記号が必要になりますよね。しかもたとえ何万、何十万の記号を用意したとしても、たった一人の人の発音をも正確に写し取ることはできないでしょう。というのも、音（声）を紙の上に移し替えるというのは原理的に無理があるからです。そこで妥協の産物として（などという音声

学の人たちから叱られそうですが)、国際音声字母(International Phonetic Alphabet)というものがあって、これは国際音声学協会が世界中の言語の音を記述しようということで設定したのですが、これをベースにしてさらに幾つかそれぞれのフィールドで必要になった記号を付加してしのいでいるようです。しかしその努力には敬意を払わざるを得ません。特に彼らは、いつどこでだれから聞いたかということをきちんと提示します。「この村では」とか「この国では」などといったアバウトなことは容認しません。言葉が個人に属するというスタンスを重視するのだと思います。

とはいえ、個人的な声(音声)を記録するだけなら、なにも苦勞して紙の上に落とす必要はなく、録音しておけばそれで済むはずです。そのほうが諸種の音声分析装置によって解析できますし、利点は多いでしょう。あえて文字記号で記録するのは、それをなにかに利用したいからです(ここ大事なポイント)。他言語との比較でもいいですし、通時的な変化を明らかにするという点でも、なんでもいいでしょう。とにかくナマの録音資料はそのままでは使えない。たとえ音声解析にかける場合でも、実験室の中で録音したのなら別ですが、日常生活のなかで録音したものには犬の鳴き声とか近くを通ったトラックの騒音とかいろいろな音が入っているでしょうし、一緒にいた他の人の声がダブっているとか、本人が咳払いをしたとか、言いよどんだとか、さまざまな音が入っていますから、データにはなりにくいということがあります。それどころか、録音だけではどこからどこまでが一つの単語かということさえわかりません。しかも録音テープには時間の制約があって、60分なり90分なりで、前後の続き具合に関わりなく切れてしまいます。次の録音テープと入れ替えているあいだに語られた声は空白になってしまいます(今のようないくつかのデジタル録音も程度の差で、バッテリーが上がったら同じです)。

我々の調査でも録音はしました。しかしそれは蒐集した地名を地図上のポイントと対応させながら番号を振って整理した上で、あらためて地名を順番に発音してもらって、それを録音したのです。そこまでやっても、録音は所詮は確認のための参考資料の扱いでした。地名調査でも言語調査でも、ナマの資料は文字や記号など、なんらかの別の形に置き換えないと使えない(言語学者の神経質なまでのこの点へのこだわりには脱帽ですが)。そうした変換済みの資料をデータと呼ぶわけです。ナマのものはデータではない。料理の下ごしらえのようなものでしょうか。下ごしらえが済んでいなければ料理には使えませんよね。泥の付いたままのダイコンは洗わなければなりません。

さてそうすると、地図作りも置き換え、変換というわけですから、先ほどの数学の話に戻ってしまいましたね。あらら! 今日の話は行きつ戻りつですね。ただここでちょっと考えておきたいのは同じ置き換え・変換といっても、形のはっきりしないナマのもの(=猥雑なもの)を形にする変換・置き換えと、すでに形になっているものをほかの形あるものとうどう組み合わせるか切り離すかという変換・置き換えは、かなり質の違った操作だろうという点です。前者の操作では、つまりデータ化の作業ということですが、意図・目的という厄介なものが直接絡んできます。無色透明・客観的・自然的なデータというものはありません、必ず

「何に使うか」という意図・目的に合わせてデータは作り上げられます。意図や目的というのは「意味」に他なりませんから、これは先の数学の話でいうともっぱら「意味」が重きをなす数理論理学の領域です。それに対して後者の操作は、たしかに意図・目的はあるものの、むしろすでにできあがっているデータを組み合わせ、組み替えるという「記号」の領域の操作だといってよいでしょう。

地名に関連する話はこのくらいにしておいて、今度は地形図・図面・写真の話をして、おしまいにしましょう。

地名蒐集に携わった我々素人 4 人は、日本を出発する前に長野県の青木湖というところに合宿して、航空写真の使い方を訓練されました。青木湖周辺を撮影した航空写真を見ながら自分の位置を確認するという作業が主目的でした。そのときついでに訓練させられたのが「実体視」（立体視ともいいます）というものです。航空写真は上空からほぼ真下を見た絵ですから、地面の高低はまったくわかりません。ところが実体視をすれば、平面（2次元、2D）であるはずの写真が浮き上がって見え、立体（3次元、3D）になります。つまり、よりリアルに見えるというわけです。

たとえばおなじみの早稲田周辺の航空写真を見てください。Googlemap などが手軽で便利ですね。その航空写真のなかから早稲田のランドマークである大隈講堂の時計台を探し出すのは結構難しいと思います。時計台がほかの建物より高いか低いかとなるともっと難しいでしょう。ところが実体視をすればそれがわかるようになります。早稲田周辺の実体視用写真があるかないか知りませんが、ネット上にはたくさん他の場所の実例があるので、あとで「実体視」で検索して、好きなサイトで体験してみてください。PCのモニター上でも問題なくできます。結構面白いですよ。

その仕組みは簡単で、上空をゆっくり飛ぶ飛行機かヘリコプターで、一定時間ごとに同じ角度で真下の写真を撮り続けます。そのうち、実体視したい区域が 60~70% オーバーラップした写真を 2 枚取りだして、右眼で 1 枚を、左眼でもう 1 枚の写真を同時に見ます。といっても最初はこれが大変なんですけど、一度できてしまえばあとは楽です。私の場合は寄り眼をするような感じでやったらできました。そうするとあら不思議、高いものは浮き上がって、低いものはくぼんで見えます。まさに 3D 画像です。専用のゴーグルなんていません。

これは右眼と左眼のあいだの距離を利用したものです。私たちの両目はそれぞれ微妙にずれた「画像」を見えています。右眼と左眼を交互につむってみればわかります。そのずれが立体感を生み出している。ですから実体視写真は、巨人が上から地面を見ているのと同じ状態を創り出すわけですね。最初の写真が巨人の右眼、2 枚目の写真が巨人の左眼ということです。この 2 枚の写真を撮影した地点の距離が巨人の両目のあいだの距離です。この距離を飛行機のスピードと経過時間から正確に計算しておけば、単に浮き上がって見えるとい

うだけでなく、その高さまできちんと数値化できます。そして同じ高さの地点をあとから線で結べば等高線になります。ですから航空測量で地形図を作る場合、わざわざ重い測量機材を担いで地べたを這いつくばるようにして実地調査をする必要はありません。ならば衛星写真を使えばもっと楽じゃないかと思うかもしれませんが、あれは地面から離れすぎているので「両目のずれ」がほとんどなくなってしまう、かなり高性能のコンピューターで解析しても、建物など地上の物体の高さはアバウトなものになってしまうそうです。

ともあれ、この実体視の仕組みは現在のVR（バーチャル・リアリティー）でも変わらないわけですし、静止画を動画に置き換えればVR映画になります。一定の距離をあけて同じ方向（角度）に向けた2台の動画カメラを回し、その映像をゴーグルの右眼と左眼にそれぞれに振り分けて流してやればいいわけです。サラウンド音声をリンクさせるのもそう難しいことではないはずです。さらに、動画フィルムを従来のアナログからデジタルにしてやれば動きは格段になめらかになって、リアルな感じを出せる。

さてそこで、今度は「リアリティー」とはそもそもなんだろうというひじょうに厄介な問題に首を突っ込まなくてはならないんですが、そういう面倒くさい問題はあとまわしにして、今はとりあえず、2Dの航空写真から3Dの実体視写真を経て最新のVRまではどうやら一つながりのものらしいという点だけ抑えておいた上で、そうした航空写真は「リアル」かどうかだけ考えましょう。

なお、私はヒジャーズ調査で最初のうちはよりリアルなはずの実体視の写真も使いましたが、すぐにやめてしまいました。一つは実利的な理由です。四駆に乗って道なき道を走っていると、その揺れは尋常ではありません。上下左右おおいに揺れます。そんなとき紙きれなんか見ていたらたちまち目が回って、気持ち悪くなってしまいます。まして寄り眼をして2枚の写真をじっと見つめるなんてことは面倒くさくてやってられません。それに、同乗しているベドウィンや運転手とも常に話していなくてはなりませんし（四方山話がほとんどですが）、地名が出てきたらその場でメモもしなくてはなりません。やっちゃいけないよ、というのが実際でした。

もう一つの理由は、たとえ実体視で地面の起伏がわかったとしても、それで自分のいる位置がわかるとは限らなかったことです。自分がどこにいるのかわからないというのは、写真が2Dか3Dかということにかかわらず。わかるときにはわかる、わからないときにはわからない。たとえば山岳部では地面の突起物やへこみが多いため、3Dでいったん自分の位置が特定できても、ちょっと移動するとすぐわからなくなってしまいます。なにしろ自分の右側に見える山が写真上のどの山か、周辺は同じような山ばかりですからね。これが砂丘地帯のような平坦地の場合には、もっと困ってしまいます。そもそも高低差がないのですから3Dの意味がありません。それどころか写真上の地面の色の違いが強調されすぎていて、何かあるのかと思って実際その近くに行っても何もなく、写真にだまされたような気になります。

さて私が考えたもっと重要なことは、2D にせよ 3D にせよ航空写真のような鳥瞰図と、ふつうの地上写真に相当する虫瞰図はまったく別のものであるにもかかわらず、それらを無理やり紐付ける（リンクさせる）のが地図製作だということでした。それを疑似体験できるのが再び googlemap のストリートビューです。写真版のほうでも地図版のほうでもいいですが、人の形のアイコンをどこかの地点に落とせば、たちまち地上写真に切り替わりますね。それでしばらく歩いて行ったり、角を曲がったりするともう自分が北に向かっているのか東に向かっているのかわからなくなる。そこで助けてくれるのが左下隅のほうに小さくある「地図」ですよ。その地図のなかにある人型アイコンを見て、「あれ、違った道に入っちゃってる。もとの道に戻ろう」とか判断します。でも、ここからが重要なんです。ふだんの生活で私たちは滅多にそんなことをしません。お目当ての飲み屋とか会社とかに行きたいとき使うのはナビだと思いますが、音声ナビにしろ画像ナビにしろ、出てくるのは地上写真（虫瞰図）に相当する情報だと思います。「200 メートル直進して右折してください。あと 300 メートルです」といった調子。カーナビでも一緒に、たしかに画像としては鳥瞰地図が出てきても、右折すれば画像の向きが変わって、いつも進行方向が上に来ます。東西南北とか広域図の中のどこにいるかなどという情報はありません。必要ないわけです。

カーナビで突然思い出したのですが、<最初の旅>に出る前、浅草で新聞店に住み込んでいたという話をしました。サンケイ新聞だったので購読者数が少なく（笑）、配達区域はかなり広がったんです。しかもあのあたりは真っ平らで、道は碁盤の目のようになっていますから、どこを見ても同じような風景です。どうやって配達先を覚えたと思いますか？地図なんか広げていたら自転車をこげません。そこで前任者から配達区域を引き継ぐときに、腰にぶら下げられるくらいの順路帳という大福帳を作って、そこに「直進」とか「右に曲がる」とか「アパートの2階」とか「奥から2軒目」といったあの業界独自の符号を先輩から教えてもらって、前任者と一緒に回りながら、書き込んでゆきます。一枚目には最初の家、2枚目には次の家、という具合に、日めくりカレンダーみたいにするわけです。そうすればいちいち地図を広げなくても、片手で自転車のハンドルを握ったまま次の目的地がわかりますし、自分独自の目印などの付加情報があればそれも書き込めます。まさに手作りのカーナビですね。今時ですからスマホでもそんなことができるのかもしれませんが、それは知りません。でもその程度のアプリならすぐ作れそうですね。

そうすると地図（鳥瞰図）というのはいったいだれが必要とするのだろうか。生活に結びついているのは、言い換えればリアルでなければならぬのは、鳥瞰図ではなくて虫瞰図のほうなのではなからうか。そこで現実的なことをちょっとおさえておきたいと思います。地図、特に基準・標準となる国土地図はふつう国家の管理下に置かれます。サウジアラビアも当然そうですし、エジプトでもモロッコでもそうでした。きちんとした詳細な地図を求めようとする、しかるべき役所へ行って正式な申請手続きをするか、あるいは特別なコネを利用するかしないかで、本屋やキオスクあたりで自由に買えるというようなものではありません。日本でも同じです。国土地理院（国土交通省）に測量から発行までの権利があり、

法律で保護されています。紙媒体の地図ばかりではなく、デジタルの数値地図でも同じです。ふつうどの国でも地図の利用はまず治安と軍事が優先目的となるからです。なので内務省や軍の管轄下に置かれることが多いのです。日本でも戦前は内務省が地図を、軍が測量を管理していました。内務省と軍というのは連携していることが多く、どの国でも一番怖い機関です。そして地図は一種の軍事機密とってよいのかもしれませんが。

ともあれ、日本の場合現在地図を日常的に一番利用するのは運輸・輸送・流通関係の人たちでしょう。そして輸送最大手は日本通運ですが、この会社は戦前は国策会社だったわけです。また道路も主要なものは今でも国有ですね。鉄道も長いあいだ国鉄でした。どの国でもそんな感じです。

「地図はいったいだれが必要とするか」といえば、まずは「国家」と結びついたこうした人たちだと考えられます。そして地名も地図の構成要素ですから、どうでもよいというわけにはゆきません。地元の人がどう呼ぼうと、あるいは別の呼び方であろうと、それとは関係なくいったん採用された地名が「標準」となります。標準ですから標準語で書かれねばなりません。しかも例えば日本の場合には「尖閣諸島」とか「竹島」とか、政治的な意味合いも帯びてきますから厄介です。中東で最も目立つ例といえば、同じ土地を「パレスチナ」と表記するか「イスラエル」と表記するかという政治問題があります。そう考えると、私が「エイヤッ」で地名を選択したというのはずいぶんお気楽だったのかしら（笑）。

話がどんどんそれていってすみません。「航空写真はリアルかどうか」ということに一応の決着をつけておかなければならなかったですね。「リアル」とか「現実」とかというのは人間の認知・認識に関わることでですから、脳神経科学とか情報学とか心理学とか哲学とか宗教学とか、いろんな要素が絡まった泥沼のような議論に引きずり込まれますので、深入りしないほうが無難で、ともかくここで明らかにすべきは、「航空写真は写真なんだから、地表の様子をリアルに写し取っている」といえるかどうかです。写真（この場合航空写真に限定します。報道写真や芸術写真、記念写真などの場合はもっといろいろなことを考慮しなくてはなりませんから今はやめておきます）は目的（意図）の産物だということは間違いありません。地図を起こすための正確な材料であることを求めるわけです。そうすると画角や焦点距離、絞り、撮像画面サイズ、構図、撮影角度、撮影時刻など、ほかにも数多くのことを設定しなければなりません。くわえて、広域写真にするためには何枚かの写真を合成する必要もあるでしょうし、あるいは広角レンズの場合に端的に表れるように、周辺領域のゆがみを補正する必要も出てくるでしょう。地球大の広域写真になると、球面を平面化するための補正も必要ですね。つまりリアルに見せるためにさまざま手が加えられているわけです。2Dよりも3Dを、というのもその一環です。そしてその場合のリアルとはあくまでも地図にとってのリアルです。地図という最終目的物に合わせたリアリティーということになるでしょう。そして写真に写ったもののうち必要な部分だけを切り取ったり抜き出したりして紙の上にデザイン化したものが地図であり、地図が変換・置き換え済みの記号群だとすれば、

航空写真というのは半ナマ状態の材料といえるかもしれません。

こう考えてみると、手放し、手つかずの、自然のままなリアル、つまり「そのまんま」というものはおそくないのでしょうか。それにもし我々のナマの感覚がリアリティーだとしたら、トリック・アートにいと簡単にだまされる我々の感覚というのも当てにはならない。3D画像のリアリティーも例外ではない。そうなるとリアリティーもバーチャル・リアリティーもないという話になってくるので、やめましょう。

今回は話がずいぶん長くなってしまいました。うまくまとめられるような内容ではありませんでしたが、「具体的なブツから切り離されて空中にふわふわ浮かんでいるような言葉などというものがあるのだろうか。誰それさんといった具体的な個人から切り離された、だれのものでもないそれ自体で存在する言葉などというものがあるのだろうか」というあたりが今日のテーマだったのかな、と思います。

地図もそうでしょうし、標準語（あるいは国語）もそうでしょうし、科学もそうでしょうし、たぶん国家というものもそうかもしれません。ベネディクト・アンダーソンという人の『想像の共同体～ナショナリズムの起源と流行』という本は読んだことがおありかもしれません。国家というものについて、こういうふわふわした姿をうまく書いていると思います。

その本には書かれていなかったと思いますが、こうしたものは「正しさ」を要求します。「この文章の正しい意味は次のうちどれか」「この単語の正しい発音を次から選べ」「この語の正しい用法はどれか」等々、入試問題でよくお目にかかる設問は、このふわふわしたものから発生していますし、「その言葉の意味をはっきりさせろ」とか「その概念をきちっと定義しろ」「論理的にものを考えろ」「科学的根拠を示せ」といったお達しも同根だと私は思います。「やってらんねえよ」と思うのですが、それを言ったらバッシングです（笑）。

地図のために地名を集めるという仕事をやってみて、自分のやったことが結果としてはそういうふわふわしたものへの「貢献」（というよりも「加担」）だったのかと実感できますし、今日の冒頭で読んでいただいた地形の語彙に関する私の文章も同じ穴の貉だといわれても申し開きできないですね。砂漠の現場で学んだことがあったとすれば、そうしたふわふわしたものは「本当はどちらでもよいことかもしれません」ということかなあ。

次回はもっと短くします。

おわり。